

2017 年度 入学試験問題

国 語

(第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一昔前までは、国家があり、会社や団体や組合のような仕事上の組織があり、地域社会や家族のような共同体があり、個人があった。私たち個人はおおむね、家族を含めた三層構造で守られていたわけである。

しかも、ほとんどの人々が共有できる個人目標のイメージがあった。

「学校でいい成績を取って会社や団体に入ると必ず成功する」という「成長社会」^①独特の神話だ。じっさい経済社会が成長している限りは、この目標はおおむね タッセイされることになる。だから、日本人は頑張れた。これが「平和で安全便利で、長生きできる国づくり」という国家目標と相まって、日本の国と日本人を引っ張ってきた。

この間、学校は、産業界にひたすら「情報処理力」が高い人材を輩出^{はいしゅつ}することで、個人目標と国家目標の二つに同時に応^{こた}えることが可能だった。それで、家族からも国からも会社からも信任され続けてきたのである。

ところが、「成熟社会」に入ると、この状況は一変する。

まず、国家や企業が一人の人生を一生涯^{しやうがい}支えきれないことが明らかになった。年金や健康保険を例に出すまでもなく、永遠に支え続けられるかのように勘違^{かんちが}いされたのは、国民全体の平均年齢^{ねん}がベビーブームにより戦後一貫^{いっくわん}して低かったからだ。全体が高齢化すれば、払^{はら}う側より貰^{もら}う側が増え、バランスがマイナスに崩^{くず}れる。当たり前前の理屈^{りくつ}だ。

同時に、経済社会全体の押上^{おしあけ}効果によって個人の自由度が増し、共同体の箍^{たが}が緩^{ゆる}み始めた。地域社会は商店街の衰退^{すいたい}とともに、ほとんどの都市部でパワーを失っている。家族でさえも、その自然なケツソク^く力を失って久しい。かつて社会的な情報のすべてを握^{にぎ}って君臨した家長の姿は今ももうない。テレビやネットを中心にした情報化によって、子どもにも主婦にも情報が同時に受け渡^{わた}されるようになったからだ。父親と学校の先生が、こうした情報化によって、自らの教育力を低下させ、無条件の信任を失うことになる。

そして、個人がバラバラに動き始める時代が始まった。

なぜか？

経済力の向上に並行^{へいこう}して、家事の電化、外注化が起こり、カンタン便利な食べ物の開発がなされ、コンビニが隆盛^{りゅうせい}し、家族でしなければならない仕事が減少した（たとえば農作業や家内制手工業など）結果、一人一人が自由に動ける条件^{じょうけん}が トトノツ^つたのだ。

また、個人がバラバラに動き始めれば、価値観はそれぞれに多様化してくる。

じっさい、成熟社会では、家族の中でさえ、A 関係が対立する局面が多くなる。一家のお父さんは金利の上昇^{じやうしやう}を「住宅ローンの金利が上がる」と嘆^{なげ}くが、オジイちゃんは年金や預金金利

に関心が向くから、それを歓迎するだろう。円高の影響も多様だ。クルマメーカーに勤めているお父さんには厳しかろうが、ハンバーガー店でアルバイトをしている娘の待遇はよくなるかもしれない。外貨建て預金をしているオバアちゃんは悔しがり、海外旅行に行ってきた息子は得をした気分になる。

典型的な道徳話である「ウサギとカメ」の逸話も、その教訓はただ一つの正解「ウサギは速かったのにサボって損をした。のろくても一所懸命に歩いたカメが偉い！」に[※]収斂しない時代が訪れる。変化の時代には、ビミョーに解釈が多様化するのだ。

「レースに勝つのが目的の場合にのみ、カメが偉いと言える。レースを楽しんだのは、果たしてどちらだろうか？ むしろ、ウサギの方ではなかったか？」

「明らかに足の速いウサギが、カメに勝たせる思いやりを發揮しただけ。ウサギは偽善者として^dヒョウバンになるのが嫌だったから、わざと悪者を装った」

「先の長いレースだ。この一レースで終わりならカメの勝ちだが、次のレースではウサギは今回の教訓を生かすだろう。一〇本勝負だったら？ 人生と同様に一〇〇レース以上あったら……と考えると、休めるときに休もう、がむしろ納得解ではないか」

やや、へ理屈の類いも混ざっていたかもしれない。が、そのように、変化が激しく、一人一人の価値観が多様化する成熟社会では、複眼的な発想、柔軟い考え方を生み出す「情報編集力」が大事になる。

日本という国の将来の姿も、「とにかく経済力を」とか「もつと国民所得を」というような単純なものではなくなってくる。こうなると、国が描く「大いなる成長物語」に身を任せているわけにはいかない。流されていけば、そこそこの幸せがつかめる時代が終わったからだ。

今の子どもたちの不幸は、^②親の背中を見ても参考にならないこと。現在四〇代、五〇代の親たちは、自営業の子は自営業、公務員の子は公務員、教師の子は教師、医者の子は医者になることも多かった。親のように生きると同じような幸せがつかめるイメージが、まだあった。でも、成熟社会では勝手が違う。子どもが同じようにキャリアを積んでも、同じような幸せはつかめない。それほど、変化が激しいからである。

個人にとって、生身で生き抜くのが難しい時代になった。^I三層で保護されてはいないからだ。とくに成熟社会を迎えている多くの先進国でも、同様に家族のケツソクが崩れ、組織の箍も緩んでいる。しかし、その代わりに、個人がつながることを保障しているものがある。教会を核にした地域社会のネットワークだ。

一人一人がバラバラに生きて行くというのは、一見自由で楽しいように聴こえるが、じつは恐ろしいことなのである。ゴルフコースをたった一人で回るようなものだからだ。普通はそんな

^B感には誰も耐えられない。

だから、宗教が、その一人一人のつながりを保障する時代が続いた。

人間が生きるには、^{II}、そうした中間集団が媒介することがだいじらしい。

「宗教」という言葉は英語で「religion (レリジヨン)」。これは「religio (レリジオ)」というラテン語が語源なのだと言う。「religio」のもとの意味は「つながる」という意味だそうだ。そういえば、「relation (リレーション)」は「関係」、「relatives (ラティブ)」は親類、「relay (リレー)」はリレー競走で文字通りバトンを「繋ぐ」ことを意味する。

「成熟社会」では、個人の意思に関わりなく、人はバラバラに生きることになる。その恐怖を乗り越えるために、日本という国でも国家として宗教を動員することは可能だろうか？

まず無理に違いない。だとすれば、替わりに、どんな社会システムを築く必要があるだろう。

※ 本文でも詳述したように、今はケータイネットワークによる希薄な繋がりが、若者の空虚感を一時的に癒してくれているように見える。しかし、これが一時の誤魔化しであることに変わりはない。

孤独に生きる個人を支えるネットワーク。

その必要条件は、諸外国でのキリスト教やイスラム教の「教会」のような機能を持つネットワークであること。つまり、経済合理性や「勝ち組、負け組」といった論理ではなく、地域社会における貢献や人間の「格」を保障するネットワークであることだ。

では、十分条件はなにか。

それは、この国の成熟社会を支える市民が共有すべき「新しい道德観」を醸成する機能だ。^③ 家長が取り仕切る強権的な家族や、農村社会のような密着度の高い共同体は崩壊して久しいから、感情的に押し切るような「古い道德観」では機能しない。バラバラな個人が、それでも、守ることを共有するほうが何らかの益があると考えるような、理性的なルールが必要だろう。

「感情的な道德観」から「理性的な道德観」へのソフトチェンジが必要なのである。であれば、子どもたちの教育も変わってくるはずだ。

小学校の低学年なら、お話を聴かせる ジュウライ型の「道德」の授業でもよいとして、高学年や中学校からは、むしろ「理性の運用技術(リテラシー)」を教える必要がある。「正解」のない成熟社会を生き抜くための「納得解」の導き方を教えなければならない。

それが^④「新しい道德」である。

(藤原和博『新しい道德』より)

※家内制手工業……生産者(とその家族)が道具や材料を直接所有して、ものを生産する工業形態。
※収斂……一つにまとまること。

※本文でも詳述したように……問題文の前の部分に、「一体感を保ちにくい現代の日本で、若者たちはケータイを通じて、だれかにつながっている感覚を得ている」という主旨の記述がある。

問1 ——線 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがな等が必要な場合はひらがなでつけなさい。

問2 空らん **I** ・ **II** にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 もはや
- 2 まったく
- 3 もし
- 4 たしかに
- 5 どうやら

問3 空らん **A** にあてはまる、「左右」のように反対の意味を表す漢字を組み合わせた二字の熟語を答えなさい。

問4 空らん **B** にあてはまる二字の熟語を文中からぬき出しなさい。

問5 ——線「箍が緩み」について、使い方が正しいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 クラス内の箍が緩んで、みんな仲良くなり始めた。
- 2 彼らは初対面なのに、箍が緩み始めている。
- 3 中学に入って箍が緩んだのか、彼は遊んでばかりいる。
- 4 以前からほしかったものが手に入らず、箍が緩んだ。

問6 ——線①「『成長社会』」とありますが、文中で述べられている「成長社会」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 経済が成長することによって家庭が裕福になり、家族で自由な時間を過ごせるようになった。
- 2 学校は、個人目標と国家目標を叶えられる人材を輩出することで、無条件の信任を得ていた。
- 3 国家・会社・家族の三層構造に守られるかわりに、国が描く目標に応えなければならなかった。
- 4 変化が激しい社会に対応するため、家族や地域の共同体のような組織を大切に守っていた。

問7 ——線②「親の背中を見ても参考にならない」とありますが、これを言いかえた一文を文中からぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。

問8 — 線③ 「家長が取り仕切る強権的な家族」とありますが、次の説明はこれが崩壊した背景を表したものです。空らん(1)・(2)にあてはまることばを指定された字数でそれぞれ文中からぬき出しなさい。

(1) 六字 により個人が自由に動けるようになったことと、社会における(2) 六字
を家長が独占できなくなったこと。

問9 — 線④ 「『新しい道徳』」とありますが、筆者が考える「新しい道徳」とはどのようなものですか。「多様な価値観」ということばを用いて六十字以内で答えなさい。

(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

太輔は幼い頃に両親をなくし、その後、伯母一家に引き取られるも、うまく家族関係が築けずに児童養護施設で暮らすことになりました。淳也・麻利・美保子・佐緒里は太輔と同じ児童養護施設で暮らしています。太輔と淳也は小学校六年生、美保子は小学校五年生、麻利は小学校四年生で、淳也と麻利は兄妹です。佐緒里は高校三年生で、大学受験を控えています。太輔たちの通う小学校の運動会の前日、彼ら五人は一つの部屋、一つのベッドに集まって会話を楽しんでいます。以下の場面はそれに続く場面です。

最近、美保子と麻利はよく、佐緒里といっしょに※ 香田亜里沙の出ている映画や雑誌をチェックしている。携帯の画面を二人で覗き込んだり、同じ雑誌を何度も読んだりしている。

「都会って、こんなかわいい子いっぱいおるんかなあ」

「そりやそうよ」

美保子は何でも知っているふうに答える。都会なんか行ったことないくせに、と、太輔は舐めていた飴をがりりと噛んだ。

「亜里沙ちゃんみたいな芸能人だっていっぱいいるし、テレビとか雑誌で見たことあるお店もいっぱい。デイズニールランドもすぐ行けるし、ひとり暮らしだってできるんだから」

美保子はアセロラ味のグミをばくと食べる。みんなに分ける気はないらしく、明るい赤色をした小さな袋を手元から離さない。

「亜里沙ちゃんも、雑誌で言ってたよね。スカウトされて上京してひとり暮らし始めましたって。友達呼んで朝までガールズトークしてますって」

お部屋もかわいかったんだよね、と言いながら、美保子が自分のベッドから雑誌を取ってくる。ごちゃごちゃした表紙を開くと、さらにごちゃごちゃしたページがたくさん飛び出てきた。ありさのお部屋カスタマイズ、という文字が躍るページを、「ほらこれ！」と美保子が指さす。

「ね、楽しそうだね」

佐緒里が言う。太輔は飴を探す。

「ひとり暮らしって楽しそう」

チョコレートよりもグミよりも長い時間、余計なことを言ってしまうような自分の口を塞いでくれるものを探す。

小さなひとつのベッドの上に、五人が集まっていられる。いま、この部屋の電気を消してしまえば、この場所が世界のすべてになるような気がした。

「ていうか、佐緒里ちゃん、きょうは勉強しなくていいの？ 勉強しないと、亜里沙ちゃんみたいなひとり暮らしだってできないじゃん」

雑誌をぺらぺらとめくりながら、美保子が言った。確かに、運動会前日だからといって、佐緒里がこうやって太輔たちと夜を一緒に過ごしているのは珍しいことだ。

「実はね、模試で、A判定だったの。先生にも褒められたし、ちよつと今日は休憩」
佐緒里は、「もう一個だけ」と一口チョコレートを手取る。

「A判定って？」

思わず太輔は聞く。飴がもう残っていない口は、すんなりと開いてしまった。

「合格率八十パーセント以上ってこと」なぜか美保子が答える。「佐緒里ちゃんはこのまま順調にいけば、ちゃあんと、夢、叶えられるってことよ」

「夢って？」

オウム返しを繰り返す太輔に、はあ、と美保子がため息をついた。

「そんなの、亜里沙ちゃんみたいになることに決まってんじゃない。東京でひとり暮らしして、自分のやりたいことやって。ね？」

「そうなの？」

太輔は、美保子ではなく、佐緒里自身の口で、ちゃんと答えてほしかった。そうだなあ、と視線を泳がせたあと、佐緒里はぽつりとつぶやいた。

「亜里沙ちゃんみたいになれたら、それは確かに夢みたいだな」

② 何かで口を塞ぎたい。太輔は飴を探す。

「ごめん、麻利ちゃん！」

バン、と、大部屋のドアが開く。ばふんと布団をかぶせて、淳也がとっさにお菓子を隠した。

「遅くなっちゃった、旗。干してたことすっかり忘れてて」

※ みこちゃんが何か布のようなものを持って、部屋の中にずんずん入ってくる。がさごそとはみ出しているお菓子を隠す淳也を、太輔はさりげなく背中を隠した。

「何みんな、ひとつのベッドにぎゅうぎゅうづめになって……」

「みこちゃんありがとー！ むっちゃきれいになっとる！ 真っ白！」

麻利はベッドからA立ち上がると、みこちゃんから何枚かの布を受け取った。太輔ののひら二つ分くらいの布からは、使い古されたヒモがたらんとぶら下がっている。

「それ、踊りで使う旗？」

布をランドセルの上に並べている麻利に向かって、美保子が言った。

「うん、そおー」

明日、全校児童で踊るあの踊りに必要な旗は、柄に結びつけているヒモをほどけば、布の部分を取り外すことができる。ずっとずっと昔から使われ続けている旗の布は、どの子のもも薄汚れていてポロポロだ。

「うち、学級委員やから。クラスの子たちの分、キレイにせなあかんの」

「麻利ちゃん学級委員なの？ なんか意外！」

佐緒里が、美保子の頭からひとつずつピンを取っていく。美保子のまっすぐな髪には少しのあともついでいない。

「うん、おしごといっぱいなの。 ※ 泉ちゃんの方も ※ 朱音ちゃんの方もみんなの分も、きれいにせなあかんの！」

「ふーん」

垂れてきた髪を肩の後ろにやりながら、美保子が言った。

「ミホが学級委員のときは、そんなことしなかったけどな」

へんなの、という言葉とともに、パタンと雑誌が閉じられる。重たそうな雑誌の裏表紙では、香田亜里沙がカラフルなスニーカーを履いてこちらに背を向けていた。

一度気になってしまったら、もうダメだった。

もう少し前だったら、夜中にトイレに行きたくなったとしても、朝まで我慢した。消灯時間を過ぎると廊下の電気まで消えてしまうから、トイレに行くまでに越えなければならぬ試練が多すぎる。

太輔は意を決して **B** 起き上がり、二段ベッドから降りた。さつきまでみんなで集まっていた下の段のベッドでは、淳也がうつ伏せで寝ている。

裸足の足が、冷たい床に触れて気持ちいい。 ③ 自然とかか上ががる。 **C**、みんなの寝息

が部屋の中を行ったり来たりしている。
天井の電灯から伸びるヒモを二回引っ張って、豆電球をつける。部屋の中が、濃いオレンジ色になる。

太輔はかかとを上げたまま **D** 移動し、佐緒里の机の前に立った。佐緒里が中学生のときからずっと使っているくたくたのかばんから、何冊か、テキストがこぼれ出ている。

小学校の教科書と違って、表紙も、中身も、華やかではない。太輔が今使っている教科書から、カエルやチョウチョがたくさん写っているカラーページなどを除くと、こういうシンプルなものだけが残るのかもしれない。

みんな、わかっているのだろうか。太輔は、暗い部屋の中でほのかに光るテキストや参考書の表紙を見つめた。

合格率八十パーセントってことは、佐緒里がずっとずっと遠くへ行ってしまう確率も、八十パーセントってことだ。降水確率が八十パーセントの日は、必ず学校に傘を持っていく。それくらい疑いのなさで、佐緒里は離れていってしまう。それこそ香田亜里沙みたいに、写真とか、そういう実物でないものでしか、会えなくなってしまう。

ぎゅつと、ポケットの中の拳を握りしめる。汗ばんだてのひらに、黒蜜の味がする飴の丸がびつたりとくっつく。

何か口に含んでいないと、余計なことを言ってしまうそうだった。みんなが佐緒里のA判定を褒めるたびに、口がむずむずとした。こぼれ出そうになる言葉を飲み込むためには、飴やチョコレートが必要だった。

佐緒里がうれしそうに将来の話をするたびに、胸の中がガリガリと削られていくような思いがした。

佐緒里の夢は、亜里沙ちゃんみたいになること。つまり、ここから離れていくこと。

太輔は、佐緒里の机の上の参考書やテキストのいくつかを手に取った。爪先立ちのまま、床の上を滑るように自分の机まで移動する。音を立てないようにしながら、一番下の引き出しを開ける。そこには、太輔のてのひらよりも少し大きいくらいの封筒が入っている。

みこちゃんから受け取った封筒は、その日に一度だけ、封を開けた。誰にも見つからないように、布団の中にくるまって、伯母さんのきれいな字を追った。

封筒の白をじっと見つめる。④ 手紙の中の文字が、ぼんやりと透けて見える気がする。

私の夢は、あなたともう一度いっしょに暮らすこと。

参考書とテキストの表紙をじっと見つめる。

佐緒里の夢は、ここから離れてひとりで暮らすこと。

キイ、と背後で音がした。

「あれ」

太輔は、持っていた参考書を慌てて引き出しの中に隠した。

「太輔くん、起きてたん？」

振り返ると、パジャマ姿の麻利がドアのそばに立っていた。ドアが開いた音、引き出しを開けた音、そして自分の a の音。誰かが起きてしまうのではないか、と不安になる。

「あ、おう」

「トイレ？」

麻利の背後に延びている廊下の電気が点いている。「うちもトイレ。お菓子食べただけでジュース飲んでへんのに」すっきりすっきり、と、鼻歌を歌いながら麻利は小部屋のドアを開ける。

「麻利」

思わず、呼び止めてしまった。

「ん？」

麻利が大きな目でこちらを見ている。淳也はきつと聞かない。だったら、誰かが代わりに聞かない。

「麻利、あのさ」

「……太輔くんってさあ」

言葉に詰まっていると、麻利のほうがか口を開いた。

「お姉ちゃんの⑤ ジュケン、うまくいってほしくないん？」

「はっ？」

ぶわっと、脇の下から汗が噴き出した。一班のみんなが寝ているふりをしているだけで、本当はこの会話が聞かれているんじゃないかと、不安になる。

「そんなわけねえだろ」麻利の目を見ることができない。「受かってほしいって思ってるに決まってるじゃん」

「ふうん」

麻利は納得していない様子で、濡れたてのひらをバジャマに擦りつけている。

「なんか、あんまり喜んどうらんように見えたから。」^⑥Aハンテイ？ の話しとるとき」

麻利は疑いの表情を消さないまま、「あ、ろうかの電気消しといてねん」と自分のベッドに戻ろうとする。

「あ、待って」

ちよつとストップ、と、太輔は思わず麻利の肩を掴んだ。あんなにも細い淳也の肩よりも、その妹の肩は、もつと、ずつと細かった。

「最近、朱音ちゃん、遊びに来ねえな」

肩を掴んだまま、太輔は言った。

「……前はけっこう来てただろ、ほら、ピアノ弾いたりして」

思わず、声が小さくなる。何に負けたのかはわからないけれど、太輔は麻利の肩からパッとその手を離れた。

「太輔くん」

麻利は、ニッと笑った。

「うち、朱音ちゃんのこと、大好きなんよ」

豆電球だけが頼りの暗闇の中で、麻利の白い歯はピカッと光った。

「麻利」

太輔は、もうひとつだけ聞こうと思った。きつと、聞きたくてたまらないはずなのに、あの頼りない兄が絶対に聞けないこと。

「学校、楽しいか？」

なにい、と、麻利は笑った。

「うちな、学校も、みんなのことも、大好きなんよ」

そんなやおやすみ、とベッドに入っていく小さな後ろ姿を見ながら、麻利はもうひとり夜中にトイレに行けるんだ、と思った。ちよつと前までは、トイレに行くために淳也をごそごそと起こしていた。そのたび、淳也の上の段で寝ていた太輔まで起きてしまい、結局淳也に頼まれて三人でトイレに行っていた。

麻利が一人で点けた電気に、廊下が照らされている。

麻利は強くなっている。だからもう、^⑦人の嘘だっって見抜けるし、自分で嘘だっってつける。

(朝井リヨウ 『世界地図の下書き』より)

※香田亜里沙……佐緒里が憧れているアイドル。

※みこちゃん……児童養護施設の指導員。太輔たちの施設での先生役。

※泉ちゃん・朱音ちゃん……ともに麻利と同じクラスに通う女の子。

問1 空らん A D にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 そろそろと
- 2 ぴよこんと
- 3 がばつと
- 4 すうすうと

問2 ——線①とありますが、「余計なこと」として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「東京でひとり暮らししても、亜里沙ちゃんみたいになれるわけではないよ」
- 2 「A判定だからって合格するとは限らないんだから、油断してちゃだめだよ」
- 3 「明日は運動会があるから、佐緒里も勉強ばかりしないでみにきてよ」
- 4 「ひとり暮らしはとても楽しそうだけど、その分いろいろ大変そうだよ」

問3 ——線②「何かで口を塞ぎたい」とありますが、「太輔」はこのように思いながら、もう一方ではどのように感じていますか。「太輔」の心情を比喩を用いて表している一文を、ここより後の文中から四十五字でぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。

問4 ——線③「自然とかかとうが上がる」とありますが、「太輔」のどのような心情がこの動作にこもっていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 部屋を移動するのに足音をたてて、みんなが起きてしまうことを恐れる気持ち。
- 2 トイレに行くために冷たい床を裸足で歩き、足が冷えてしまうことを恐れる気持ち。
- 3 トイレに行きたいが、恐怖から電気の消えた廊下に出ることをためらう気持ち。
- 4 テキストなど物が散乱している散らかった床を、裸足で歩くことをためらう気持ち。

問5 ——線④「手紙の中の文字が、ぼんやりと透けて見える気がする」とありますが、このように見えたのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 その手紙は「太輔」にとって印象が強く、記憶に残る内容だったから。
- 2 その手紙は「太輔」の期待どおりの内容で、うれしいものだったから。
- 3 その手紙は何度も繰り返し読んだため、完全に覚えているものだったから。
- 4 その手紙はとても字がきれいで、伯母のことを見直させるものだったから。

問6 空らん を含む一文は、「太輔」の不安が大きいことを表しています。空らん には体の一部を表すことばが入ります。そのことばを漢字二字で答えなさい。

問7 ——線⑤「ジューケン」・⑥「Aハンテイ」はいずれもカタカナで表記されていますが、この表現からどのようなことが読み取れますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「麻利」にはそれらのことばの意味が全く理解できず、「太輔」のようにその先にまで考えが及んでいないということ。

2 「麻利」の話す方言は、普段標準語を用いる「太輔」にとっては耳慣れないものであり、きこちなく聞こえているということ。

3 「麻利」は「佐緒里」の進路やそのことば自体の意味にも興味がなく、自分には関係のない他人事のように考えていること。

4 「麻利」にとっては具体的なイメージがつかめなかったり、単純に「音」として理解したりしていることばであるということ。

問8 ——線⑦「人の嘘だつて〜つける」について、次の問いに答えなさい。

I 「人の嘘」とありますが、これは誰がついた、どのような嘘ですか。「〜という嘘。」に続く形で、二十五字以内で答えなさい。

II 「自分で嘘だつてつける」とありますが、それは「麻利」がどのような返答をしたからそのように感じたのですか。それを説明した次の文の にあてはまることばを五字以上八字以内で答えなさい。

「麻利」が問いに対して 返答をしたから。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

梅雨明け

荒木忠男

往還^{おうかん}の向こうから
思案顔^{しあんがん}の^①白い男がぼつん
せわしく扇子^{せんす}を使いながら
暑^かそうな夏を抱え
やっできている

左手^{ひだりて}の黒い鞆^{かばん}の金具が光って
なに入っているのだろう
かかえきれない心の重さなのだろうか
すこし下がった肩^{かた}が気になる
時々ぱっと消える時がある

それを見越^{みこ}したように
高み^{たかみ}の物干し棹^{さお}の
真白なランニングシャツが
白魚のように跳ねて

真つ青の空の海
青波も立てず

② 藻のような残り雲すこし
梅雨の尻尾^{しっぽ}が残っているのだ

小路を走りぬけてゆく
はしゃいだ
張り^dのある子供らの声
土塀^{どべい}もれんじ窓も透きとおって
明^あるんできたぼくの書齋^{しよさい}に
③ 海の香を運んでくるようだ

問1 ……線 a ~ d」の中で、一つだけ他と意味・用法がちがうものがあります。それはどれですか。記号で答えなさい。

問2 ——線①「白い男」とありますが、この「男」の説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 重そうな鞆を手に持ち道路の向こうからやってきた。
- 2 いかにも仕事がいそがしいようなそぶりをしている。
- 3 何かものごとを考えこんでいるようなようすである。
- 4 その存在が暑い季節がおとずれたことを感じさせる。

問3 ——線②「梅雨の尻尾」とありますが、ここでは梅雨のどのようなようすを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 夏空におされていた梅雨がぶりかえしたようす。
- 2 はげしかった梅雨の勢いが弱まっているようす。
- 3 長くつづいた梅雨のなごりが感じられるようす。
- 4 雨上がりとともに梅雨がやっと終わったようす。

問4 ——線③「海の香」とありますが、この詩の中でえがかれている「海」について説明したものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法を用いた表現で空を海にたとえ、梅雨明けのはればれしさをえがいている。
- 2 体言止めなどを用いて空と海を強く関連づけ、梅雨明けを強く印象づけている。
- 3 第四連以降に海に関係する事物をつづけて登場させ、イメージを深めている。
- 4 目で見たものだけでなく、音やにおいなど多くの感覚で海をとらえている。

問5 この詩の特徴の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 梅雨が明けて夏がおとずれるころの情景が目にかぶようにえがかれることで、作者の心情が想像しやすくなっている。
- 2 季節の変わり目特有の風物を多く取り入れることによって、新しい季節への期待とともに去りゆく季節をおしんでいる。
- 3 作者が書斎からながめた景色をそのままえがくことにより、予想外の展開をふくみながらも読者の共感をさそっている。
- 4 白と黒、明と暗など、複数のものを対比させることを通じて、夏をむかえようとする開放感を生き生きとえがいている。

4 次のⅠは「十」で隣りあう字を組み合わせると一つの漢字になるパズルです。また、ⅡはⅠのパズル内①～⑤に入る字の成り立ちを説明したものです。ⅠとⅡのそれぞれを参考にし、①～⑤にあてはまる字を答えなさい。

I

⑤	+	女	+	①	+	彳
+	+	+	+	+	+	+
貝	+	②	+	木	+	(例) 責
+	+	+	+	+	+	+
③	+	力	+	④	+	糸

II

(例) 先のとがった針と財貨をあらわす「貝」を組み合わせた字。貸借についてせめさいなむ意を持つ。

↓答え：責 「彳」＋「責」＝「漬」・「糸」＋「責」＝「績」

①女性(母)がかんざしをさしているさまをあらわした字。古代中国では髪を伸ばす風習があり、髪の伸びきったさまから、「常に」や「立て続けに生じる」という意になった。

②足を「×型」に組んださまをあらわした字。この足の形が意を持つようになった。

③発音や発声したときのさまをあらわした字。一人の人間に一つしかない器官であるため、人数を数えることばでもある。

④二線の間に縦線をえがいた字。上下の面に穴を通すことから「高度な技」の意に転じた。また、神具や呪具で使われるものの形をあらわしたとの説もある。

⑤並べる意をあらわす「二」と人が体をかがめたさまを組み合わせた字。「順序つけて並べる」という意を持つ。